

子どもと家庭の支援を考えよう
— 保育の現場から地域へ —

灰谷 和代

東北公益文科大学総合研究論集第42号 抜刷

2022年1月31日発行

FORUM21（公益教養プログラム）開催報告

子どもと家庭の支援を考えよう — 保育の現場から地域へ —

灰谷 和代

2021年11月6日（土）10時～12時、東北公益文科大学 公益ホール（酒田市公益研修センター）にて、地域の保育士と作業療法士と共に「子どもと家庭の支援を考えよう—保育の現場から地域へ—」をテーマにFORUM21（公開教養プログラム）を開催した¹。当日の参加者は、60名（来場参加者：35名、オンライン参加者：25名）である。第1部で講演、第2部でパネルディスカッションを開催したので以下に報告する。

第1部：講演

「保育現場における子ども家庭アセスメントの必要性」

東北公益文科大学 准教授 灰谷和代

児童虐待対応件数は、毎年、増加傾向にある。2020年度に児童相談所が児童虐待相談として対応した相談対応件数は、205,029件（速報値）である。主たる相談種別は、件数の多い順から、心理的虐待121,325件（59.2%）身体的虐待50,033件（24.4%）、ネグレクト31,420件（15.3%）、性的虐待2,251件（1.1%）である。2004年の法改正で面前DVを心理的虐待とすることに改正後、警察を経由した面前DVによる心理的虐待の相談対応件数が増え続けている結果、2012年度以降、心理的虐待は、身体的虐待による相談対応件数を上回っている。

また、未就学前の乳幼児（0歳～6歳）が被虐待児童となるケースと実母・実父が主な虐待者になるケースが多い。2019年度の児童虐待相談対応件数193,780件のうち乳幼児が被虐待児童だった相談対応件数は87,486件（45.1%）、主な虐待者が実母・実父だった相談対応件数は172,212件（内訳：実母9,2426

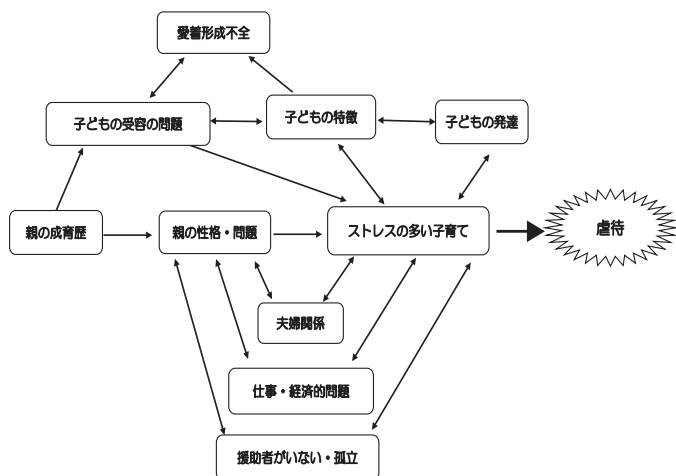
¹ FORUM21は、東北公益文科大学が主催（担当：地域共創センター）、「公益のふるさとづくり活動補助金」（庄内開発協議会）の支援を受けて開催している。

件・実父79,786件、相談対応件数全体の88.9%)である²。被虐待児童の4割以上が乳幼児であり、主な虐待者の8割以上が実母・実父である。

児童福祉法（1947）や児童虐待の防止等に関わる法律（2000）では、児童虐待を受けたと思われる児童を発見した者は速やかに通告しなければならない³、と国民に対して通告義務を掲げており、児童福祉法第5条では、保育所等を含む児童の福祉に職務上関係のある者は、児童虐待を発見しやすい立場にあることを自覚し、児童虐待の早期発見に努めなければならないことが明示されている。

社会学者であるベルスキー（1980）は、エコロジカルモデルの視点で、児童虐待発生要因を捉えている⁴。図1は、公益社団法人母子保健推進会議（2002）のベルスキーのモデルを基に作成した「虐待発生モデル」である。親の成育歴、子どもの受容の問題、愛着形成不全、子どもの特徴、子どもの発達、親の性格・問題、夫婦関係、仕事・経済的問題、援助者がいない・孤立、ストレスの多い子育ての多い子育て、との、様々な要因が重なり虐待が発生していることを図式化している。このように、様々な背景要因への対応が必要な児童虐待ケースの対応や

図1：虐待発生モデル



(公社) 母子保健推進会議（2002）『子ども虐待防止のためのサポート 母推ノート』図-3を基に作成

² 厚生労働省（2020）福祉行政報告例からの引用。

³ 児童福祉法第25条、児童虐待の防止等に関わる法律第6条に規定。

⁴ Belsky J Child maltreatment : an ecological integration. Am Psychol 1980 ; 35 (4) : 320-335.

保育現場は、虐待のみに限らず様々な子どもや家庭の様子に気づくことができるが、虐待の有無を判断する機関ではない。保育現場だけでは抱えきれない課題も多いため、市町村等の専門機関への相談や通告、連携が必要である。また、虐待発生時の発見だけでなく、虐待が発生する前からの虐待につながる要因に気づくことができること、発生後の様子を見ることができることは、保育現場の特性である。

保育現場の特性を活かした記入しやすい共通アセスメントツール「子ども家庭アセスメントシート」(図2)を、三重県内の或る町の担当課職員と保育者と共に開発(灰谷, 2017)した。本シートは、保育現場で子どもや保護者等と

[illegible]

※上記シートの活用等については、灰谷（haitani@live.jp）までご連絡ください。

のかかわりの中で「気になった」「心配に思った」ことがあった時に、まずは、気になった部分だけでなくシートの全ての項目について、保育者が「見えた部分」「見える部分」を記入する。チェックするだけでなく自由に情報を書き込みすることもでき、その日ごとの情報量にあわせた記録が可能である。また、月ごとに項目の心配の数を集計することで、経過を確認することができ、保育現場内での情報共有をはじめ、保育現場から専門機関等への情報発信や情報共有のツールとして活用することができるシートである。2018年以降、複数の市町と保育現場で、シートそのものやシートの活用方法を各市町仕様にカスタマイズして活用している。今後、保育現場の子どもと家庭の些細な気づきをきっかけに、子どもと家庭を包括的にアセスメントしていくことで、保育現場内での支援の充実と保育現場からの発信による多職種の専門機関や専門職との早期連携が可能となることが考えられる。専門機関に的確な情報を伝えるためにも、保育現場での子どもと家庭のアセスメントは必要である。

地域における保育現場の役割として、現在、在園児だけでなく、在宅で子育てしている地域の親子を対象とした「マイ保育園」等の子育て支援を実施している保育所等もある。今後、地域の子どもたちを見守るためにも、地域に開かれた保育所としての役割もまた、保育所等に求められていくことが考えられる。

第2部：パネルディスカッション

本楯保育園園長の阿部明恵氏と主任保育士の小笠原和美氏、医療法人健友会の佐藤裕邦氏、NPOやまごや代表の平向正包氏が登壇し、それぞれの取り組みを報告した。その後、質疑応答等を交えたディスカッションを実施した。

(1) 保育の現場から見えてきたもの

社会福祉法人本楯たちばな会 本楯保育園 園長 阿部明恵
主任保育士 小笠原和美

保育園（以下、園と略す）では地域の様々な方達が先生として関わり、色々な面で支援していただいている。保育士ではなかなか出来ない体験・経験をさせていただける環境と、地域の子ども達を支える先生方がいることで、子ども達も保育士も共に成長していける環境がある。そしてその成長と一緒に喜んで

下さる地域の方が身近にいてくれるというありがたい関係が築かれている。様々な環境の中で成長していく子ども達をたくさんの地域の方が支え、保育園と共に健やかに成長していくための支援をしてきている。

保育をしていると、その子を取り巻く環境と支援の必要性が大きく関わっていることに気付くことも多い。発達の課題が家庭環境に影響することも見えてきた。そこで、園では、保育士でなかなか解決出来ない発達の課題の部分を作業療法士（以下OT）に専門的な視点からアドバイスいただき、解決方法を一緒に探りながら必要な支援の方法を学んでいる。子どもを支えると同時に、保育士も支援を受け、共に成長していける環境が出来ているわけである。また、保育士とOTは、専門性が違うので、できるだけ専門用語を使わない情報交換に努めている。専門用語を使わない、保育士でも分かる言葉で伝えてもらうことによって、作業療法士の観点からその子の課題に対する支援方法を学ぶと言う新しい支援の方法が保育園の中でできるようになった。

様々な課題を持つ子を園全体で支援し見守るためには職員間での情報共有は不可欠であり、対応の統一化を図るためには膨大な量の記録をとることになる。

「子ども家庭アセスメントシート」を取り入れて活用し、見える化したことで、集会をしなくても情報共有が可能になった。そして、発達の課題と環境の課題が大きく影響し合っていることも見えてきた。傾向や対策も早い段階でとることができるようになり、万が一行政等への報告が必要になった時は報告の手段の一つとして効果的に作用できるのではと思っている。アセスメントシートの活用で保育園が出来る支援を優先しながら、課題や問題を解決でき、保護者とうまく関わり支援することで、改善すること、子どもの成長と一緒に考えることに繋がっている。また、シートがあることで職員の意識改革も期待できる。アセスメントシートが迅速な保育士間の情報共有と、保護者と一緒に子どもの育ちを支えることのできる保育士としてのスキルアップにも繋がり、それが園全体の「保育の質の向上」に繋がると考える。

保育をする上で、毎日子どもの様子を観察し見守り、必要に応じて手を貸すことがある。保育士は瞬間的にどんな支援が必要か判断しなければならない。どんな支援をすれば伸びていくか、日々悩むことも多い。そして、持っている課題が、時折家庭環境に大きく関わっていることも分かってくることもある。

一人一人の成長を支援するためには、それを日々書きとめ、保育の中で起きる様々な子どもの変化や保護者の様子とその対応を毎日のように文章にして記録する必要があった。大事なことと分かっているながらも、業務に追われながら

膨大な記録をとり、職員間で情報共有をするための会議を行う作業は正直大変だった。そして、課題や心配事がある子どもをクラスで抱えたときに、記録を読み返しながらかもって保育者として何かできることがあったのではないだろうか、自分のしていたことは良かったのだろうか、自問自答していた時に「子ども家庭アセスメントシート」を活用することになった。項目に丸を付けるだけでもその日の子どもと家庭の様子が整理でき、気になったことの詳細を加筆することもできるため、その日の状況に応じた分量の記録を残すことができる。シートは、些細な気づきから子どもの背景に目を向けるきっかけになっている。園内の誰もが同じ項目、その日の状況を見するという共通理解で記録を残すことで、誰が見ても分かりやすく園内共有もしやすい。また、気になったことがあった日に1枚記入する形式なので、枚数が増えていけば、子どもの心配が増えていることが明確となり今後の動向を見極めることができ、園内での振り返りの材料にもなるわけである。また、このように問題を見える化、そして数値化できることで客観的になり、万が一報告等が必要になった時には、説得が容易になり伝わりやすくなると考えられ、もし問題や課題を捉えるものであれば、多職種の関係者との問題共有が円滑になることにも繋がる。まずは、私たち保育士が出来る支援としては、シートの枚数が多いほど「気になったこと」「心配事」が増えてきているわけで、保護者への言葉かけや園での対応が早期にできることだと思う。そしてそれが、子ども達が安心して、安全に生活を送れている環境を守ることに繋がっている。保育園で見つける小さな気づきから、大きな支援に繋がっているのだと思う。

(2) 外部連携者の立場から

医療法人健友会 介護老人保健施設ひだまり

副施設長 作業療法士 佐藤裕邦

私は、保育園（以下、園と略す）に隣接している老人保健施設に勤務していた作業療法士である。令和2年から契約を結び、月2日の訪問し、作業療法士

として園児の発達などに助言などを行っている。

園の研修会で「子ども家庭アセスメントシート」の説明を聞き、不適切な養育を見つける目的で作られたこのシートは、活用次第で保育の質の向上に使えると感じると同時に、保育士のさらなる能力向上と保育士の気づきが増えることへの期待を持った。また、このアセスメントシートを活用していくことで、園がより地域の資源と繋がり、地域に支援を求めることに繋がっていくことにも期待を持っている。

園外から保育の支援に入ることの重要性について、令和2年から作業療法士として園に関わってきた中からをお伝えする。相談される内容は、軽い運動麻痺を含むぎこちない体の動かし方、グニャグニャした体、手の不器用さ、板書された文字を手元のノートに書き写す際の視線の移動の不自由さ、偏食があることや食事がレベルがアップしないこと、歯の咬合や口腔内の触感覚、児の生活リズム、児の心理、保護者の精神的支持を含んだ伝え方など多岐にわたる。こうした悩みを保育士は抱え、適切な専門家と相談し解決したいのである。相談を受ければ、専門性の範囲で原因を考え仮説を立て、それを保育の中で試行してみるという取り組みをしている。

園が心理的なハードルを下げ、日常の保育に外部の専門家を入れていくことは、自分たちの保育を見直すきっかけにもなるし、より高い保育に力を注ぐことが出来ると考える。

最後に、園・保育士はサポートする人との間に共通言語を持たねばならない。そのときに各種のアセスメントシートを活用することで園・保育士は課題が見えていることはとても重要であり、園だけは解決出来そうもない課題は地域の専門家と一緒に考えていく仕組みが作られることに期待する。

(3) 子どもの支援者の立場から

NPOやまごや 代表 作業療法士 平向正包

子どもの支援者、作業療法士としての立場から子どもと家庭の支援について述べる。私は、昨年度から、作業療法士として高校や学童保育にも関わり始めている。今年初め、任意団体「NPOやまごや」を立ち上げ、現在、法人化に向けて準備をしている。今後、取り組む事業は、家庭訪問による子供と家族の

支援、子供の通う場における直接間接の支援と地域の関係者と共に学ぶ研修会の開催、多様性の理解に関する体験型学習や研修、交流型の子ども食堂の開催を挙げている。

事業を行うにあたって、子どもが直面する困難さは、子どもだけに課題があるのではなく、子どもと環境の相互作用の結果であるという考えを基盤としている。子どもの特性に対して、周囲の環境がマッチしていれば、生活の中での困難さは小さくなるが、逆にうまく噛み合わないと言難さは拡大する。子どもと環境、両方がどう影響しているかがとても重要と考える。

子どもと環境の相互作用という観点から、「家庭」を考えると支援の必要な子供の家族をサポートすることは、その家族だけでなく、子供の幸福感に大きな影響を与える可能性があることがわかる。したがって、家族丸ごと支援することが重要である。

保育園では、障害と診断を受けている子供が増加しており、インクルーシブ社会への実現に向けた取り組みがなされている。加えて、支援の必要な子供の早期診断、早期支援、支援の継続の三つが重要だということが指摘されており、保育者に医学的な知識を含めた、より高い専門性が求められるようになってきている。そのため、保育園においても、子どもへの専門的な直接支援、そして、後方から保育者を後方からサポートする第三者の役割が重要になってくると考える。

近年、世界的にうつ病や不安症が増えており、格差社会やSNSの拡大が影響していると指摘されており、社会構造の変化が影響していると考えられる。その社会の特徴が、子どもの困難さを拡大させないための取り組みが必要であり、メンタルヘルスの観点からも、地域社会の中で、「安心」して過ごせることが重要と考える。そのため、様々な特性を持った子どもが、安心して地域社会で生活できるように、多様性理解の推進と子どもを中心に様々な地域の人々が交流できる場づくりを、当法人では行なっていく。

子どもと環境の相互作用について分析し、知ることが重要である。その中でも「子どもの特性を理解」することは必要不可欠である。そして、その特性の理解を、家族、支援者、地域の中で共有し、繋いでいくのが、やまごやの役割と考えている。

最後に、子ども家庭アセスメントシートの活用により、子どもと家庭の理解と課題の早期発見につながる可能性があること、そして、それに基づいて外部機関とつながる可能性がある。作業療法士として、今後、保育の現場や地域での活用が進んでいくことを期待している。

すべての報告が終了した後、会場およびオンラインの参加者に質問等を募った。専門職とつながるための方法についての質問や高齢者には契約に基づく複数の専門家の支援がある等の高齢者と子どもの支援の違い、保育現場にも医師や心理士、ソーシャルワーカー等が必要といった声があった。

謝辞

本報告に関連した研究およびFORUM21の開催にご協力いただきました皆様、当日ご登壇、ご参加いただきました皆様に、心より感謝申し上げます。

なお、本研究の一部は、東北公益文科大学2021年度学内研究助成を受けたものです。